

ビルマの鉄道と赤いバナナ

近藤 節夫

南国ビルマ（現ミャンマー）の鉄道に乗るのは、雨季は避けてどうしたって乾季になる。しのつくような夏の雨は旅行には適さない。しかし、乾季でも日中の暑さはうだるように暑い。冷房施設のない、くすんだ客車内は暑さと土埃、満員の乗客の熱気で蒸せ返らんばかりである。だが、一旦陽が落ちると車内には急激に冷気が忍び寄り、深夜の気温は優に零下を下回る。セーターなしではとても眠っていられたものではない。おまけに、道床が悪いせいか、大きく縦揺れする。乗り心地の悪さは天下一品である。車両を通り抜けるにも、つかまりながら歩くのがやっとなのである。車両の揺れにうまくステップを合わせないと、通路だっとうまく歩けない。連結器の上を渡るのは危険この上ない。途中の停車駅では裸足の子どもから、年老いた売り子までが車内にまで押し売りにやって来る。カエル、ヤモリ、イナゴ、見るからに不衛生そのものの色つき飲み物、竹で蒸した赤飯、米の天麩羅、多彩な果物、セレと呼ばれる葉巻のようなタバコ、雀の原形をとどめた串焼き等、ほとんどが食べ物だが、新鮮なものからグロテスクなものまで何でもありである。

敵地ビルマで戦った兵隊さんにとっては、水牛による田起しや、農耕のような牧歌的な車窓風景を望見して、親日的なビルマの人たちと立ち話をしていると、次第に過去へのノスタルジアが募り、懐かしさとともに心に温もりとやすらぎを覚えるようである。この原風景が復員した軍人さんを熱病のようにビルマ気違い（「ビルキチ」と呼ばれる）に駆り立てるのである。

首都ラングーン（現ヤンゴン）から 270 kmほど北上したところに、トゥングーという町がある。勇名を馳せた加藤隼戦闘隊を始め、旧陸軍航空隊が駐屯していた、素朴な航空基地の町である。

ここの名物に「赤いバナナ」というのがあって、兵隊さんが「もう一度赤いバナナを食べてえ」とうわ言のように呟きながら死んでいった、というエピソードが伝わっている。珍しい「赤いバナナ」と聞いて、私も何とかありつきたいものだと思っていたが、ある時、停車したトゥングー駅で商っている老人の籠の中に、「赤いバナナ」が幾束も積まれているのを発見した。戦跡巡拝団で一緒の元兵隊さんがそれを目ざとく見つけ、「赤いバナナがあったぞお〜！」と回りの仲間に叫んだ。しばらくして憧れの「赤いバナナ」は、籠ごと買い占められ、復員以来初めてみんなの腹の中にあつという間に収まってしまった。黄色の中味と味は変わらなかったが、確かに外見は噂通り「赤いバナナ」、そのものだった。